

## 心の旅「鎮魂と平和」

### [3] 折りばらに寄せる私の思い

宇田 賢吉(広島県福山市)



2019年4月 唐丹小学校1年生 折りばらを手に

私は地震と津波の第一報を尾道港の岸壁で聞きました。目の前の瀬戸内海はおだやかですが、三陸の地ではこの海が牙を剥いて大地に襲いかかっているのだ、と。

一番に思ったのは家族をなくした子供たちのことです。私は5歳のとき父を広島の前原で失いました。自分の歩んだ道をかえりみると、同じ思いをする子供たちがいるということは本当に無念の一語に尽きます。

また別のことも考えます。私は何とか成長して後期高齢の歳まで恥ずかしくない人生を送ってきました。それは多くの方々の手をさしのべて下さったからです。このたび津波の被害に遭った子供たちも見守る人々の善意に支えられて元気に育って行くに違いありません。

それならば自分もそのお手伝いをすべきではないか、という一念から、堀泰雄さんの呼びかけに応じて唐丹希望基金に駆け付けました。そうして高舘千枝子さんのリーダーぶりに心酔しながら今日にいたっています。

震災の年に小学校に入学した1年生が今年3月に中学を卒業したのですね。その成長ぶりをぜひこの眼で見たかったのに、コロナは先送りさせてしまいました。でも待つ楽しみを与えてもらったと老骨にむち打っています。

もうひとつ、私の気がかりは原発の被災による放射能の被害のことで。私の母は広島の前原による後遺症で一生苦しみました。その苦しみは母の世代で終りだと信じていたのに震災は新たな放射能被害者を生み出すことになりました。

放射能の被害については、国を挙げて理解不足であり教育不足です。もう少し正しい理解があれば、ふだんの対策から政治への要望に至るまでもっと前向きの姿勢がとれる筈です。個人的にも機会あるごと

に放射能がどうして怖いかの説明を続けています。皆様も一度ぜひ自分で読んで下さい。知識のないままでは前進はあり得ません。

さらに、折り紙で造るばら、折りばらの普及運動にも加わっています。ご存じのとおり折り紙は日本の伝統工芸ですが、その精巧さと美しさは世界に例を見ない独特のものです。外国の人たちに圧倒的な人気があります。

ばらは広島県福山市の市花です。70年前に戦災の跡地に市民がばらを植えたことが始まりです。ばらを育てることは思いやりの心を育てることとして、ローズマインドと名付けた市民運動を拡げています。福山市では、ばらは外来語ではないとしてカタカナを使いません。

折り紙とばらの二つが集まって、折りばらの運動が始まりました。具体的には、その志を受け継いで、世の平安を希う心を込めて、ばらを折り、広島の平和祈念式典に献納しようという呼びかけです。最初の年には多くの協力者を得て50000個の折りばらが集まりました。献納に持参するのに大汗をかいたうれしい記憶が残っています。ニューヨークでテロ事件が起きたときも会員手作りの折りばらを献納して、ブルームバーグ市長から直筆の礼状が届きました。

その後も引き続き、世界で戦災や災害に遭った人たちを励まし平和を願うために、心を込めて折りばらを造ろうと呼びかけています。その流れを汲み、唐丹小学校中学校で学んでいる児童、生徒のみなさまを支える力の一端になれば、との思いを込めて折りばらを造っています。材料はいろいろな紙がありますが、私はひもうせんを塗った和紙が最も美しくて気に入っています。

ささやかな折り紙ですが、その内には歴史と願いと希望が詰まっていることをお伝えして、折りばら紹介のごあいさつといたします。



2019年3月唐丹中学校卒業生 折りばらを胸に

